



アートな麻布に魅せられて⑳

4倍に拡大! 新・麻布警察署が2月より始動

六本木交差点からほど近い六本木6丁目に、昭和47年(1972)築の麻布警察署があった。47年間、ほぼ半世紀を経て老朽化したこともあり、2019年2月、令和の時代を迎えようとしている中、東京ミッドタウンにほど近い、六本木4丁目の旧区立三河台中学校跡地に新庁舎を竣工。ぐんと大きくなった8階建ての新・麻布警察署に伺った。

麻布の地名にふさわしい、市松模様の外観が印象的

新庁舎のファサード(建物正面)は、正方形の市松模様が連なる。麻布の地名に由来する、麻の布をモチーフにしているという。周囲は大小のビルが立ち並び、路地の小さな飲食店とコーディネートして「アジア」の景観そのものを感じ取れるロケーションだ。その中でひと際目立つ新庁舎は、旧庁舎の4倍の床面積(約1万6400㎡)を誇る。ちなみに敷地面積は約4000㎡だ。

バリアフリー、LED照明、太陽光発電、環境にも配慮

旧庁舎の受付は2Fにあり、狭くて暗い階段を利用するしかなかった。新庁舎になっての大きな改善点は、全館バリアフリーにしたこと。駐車場から車椅子利用者でも、エレベーターですんわり行けるようになった。中央に大きく明るい受付があり、区民にとっても、使い勝手がよい印象だ。トイレも身障者用が完備されている。

署内は全てLED照明で、屋上にソーラーパネルを設置して太陽光発電を利用している。不足分は電力会社から補う。その数値が1Fでパネル表示されていて、エコな建物を強調している。

3Fには畳敷の武道場があり、剣道・柔道に汗を流す警察官の音が響く。一部は子ども達にも開放されている。立ち入ることができない部屋もあり、全ての見学は無理。だが、警察署だから留置場もあり、面会の部屋も並んでいた。

麻布警察署の歴史は虎ノ門から始まった

麻布警察署の歴史を紐解くと、ホームページには明治8年(1875)虎ノ門に創設されたとある。麻布警察署に改称されたのが明治21年(1888)、そして昭和47年(1972)、旧庁舎完成へと続く。

現在、署の管轄エリアは六本木1丁目の一部と2~7丁目、西麻布、元麻布、麻布台、麻布狸穴町、麻布永坂町、東麻布、麻布十番、南麻布と広範囲だ。大使館は50以上、外国人居住者も多く、10%以上を占める。何より24時間眠らない六本木繁華街を抱え、日本有数のグローバルでかつ不夜城の街が管轄下にある。言語、習慣の違いに対処しながらの業務は、ご苦労も多いことだろう。まさに人種のるつぼの真っ只中の警察署という印象だった。

麻布警察署の署員は430人余と大がかりな体制だ。365日、4交代24時間、街の安全安心を見守ってくれる「おまわりさん」に、改めて感謝の意を表したい。令和の時代も私たちの生活が安全安心で、住みやすい街であり続けますように、と気持ちを新たにできた貴重な見学だった。

港区六本木4丁目7番1号
電話/03-3479-0110
取扱い時間/平日 午前8時30分から午後5時15分まで
土曜、日曜、祝日、年末年始の取り扱いなし

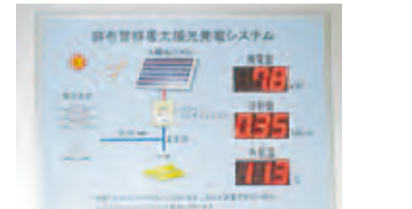
取材協力 麻布警察署



麻布警察署警務課警務係長 警部補の坂井光義さん。「旧庁舎では、職員同士すれ違うのも大変でしたが、新庁舎は広々していますので、仕事も効率よくできます」。



1F中央にある受付。



太陽光発電システムの、現在の発電量が明記される。



車椅子でも使用可能な「だれでもトイレ」も完備。



「こども110番教本」で配布される「いかにのおすし」、大人のあなたはわかりますか? 「㊦㊧ない、㊨らない、㊩おきい声を出す、㊪く逃げる、㊫らせる」。「いかにのおすし」で子どもたちが毎日安全に過ごせますように。



昭和7年(1932)当時の麻布署



平成31年(2019)2月までの旧麻布署。東京都との等価交換で、現在旧庁舎は都の所有地。今後の予定は解体予定も含めて未定(2019年5月現在)。



新庁舎の外壁は、見事な市松模様だ。



麻布びと

未来へ残したい麻布の声

東宝株式会社相談役

高井英幸さん

ひでゆき

(78)

大画面と大音響で映画に酔う、それが長寿の秘訣です

今回登場の高井英幸さんは、小学5年生の1952(昭和27)年から2006(平成18)年までの54年間、麻布十番に住んでおられました。戦後、昭和の時代から1965(昭和40)年まで麻布十番には4つの映画館がありました(地図)。ここで映画に出会い、特に洋画に夢中となりました。以後中学・高校・大学の10年間ひたすら映画に没頭し、1964(昭和39)年東宝株式会社へ入社。38年後の2002(平成14)年から9年間、社長を務められました。



プロフィール

1941(昭和16)年東京生まれ。南山小学校、城南(現、六本木)中学校出身。立教大学卒業後、東宝株式会社に入社。興行部、有楽座、スカラ座、日比谷映画など映画館での勤務の後、東宝映画の制作現場へ、映画調整部を経て、2002年より東宝株式会社代表取締役社長。2011年に退任し現在は東宝株式会社相談役、公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団理事、公益財団法人ITM伊丹記念財団理事。

1950年代の麻布十番商店街



衝撃のハリウッド映画

映画との出会いをお話いただけますか。

「1941(昭和16)年の2月に生まれまして、この年の12月8日に日本は、アメリカ合衆国ハワイ(準)州のオアフ島真珠湾を攻撃し太平洋戦争に突入します。4年後の1945(昭和20)年、日本の敗北で終戦。4歳で防空壕や空襲を体験し、かつ戦後の混乱期に苦勞する親を見てきた私としては、もう戦争は結構だという思いで育ちました。ところが、戦後学校の授業で観る映画は『禁じられた遊び』(1952)、『二十四の瞳』(1954)などの戦争の悲劇を描いたものが多く、子ども心にもう暗い話は止めてくれ、何か明るく楽しいものはないかと思っていました。そんな時に、麻布十番の映画館でハリウッド映画と出会ったのです。」

ミュージカルや西部劇、ラブストーリー、SF、スペクタクル映画そのほとんどがカラー映画でした。中学生にとっては、まさに情報の宝庫で目を見張りました。当時、日本を占領していた米軍の政策、アメリカは凄い!のPRにすっかりはまったわけです(笑)。中学時代、戦争の後遺症から抜け出て精神的安定を取り戻したのは、この洋画のお蔭であったことも事実なのです。」

麻布十番の映画館にて

著書『映画館へは、麻布十番から都電に乗って。』(写真①)でも語られていますが、麻布十番の映画館についてお聞かせください。

「麻布十番には映画館が4館ありました。現在はビオセポンのある場所に、洋画を上映していた麻布中央劇場とのちに麻布東映となった麻布映画劇場がありまして、十番稲荷神社の向かいの自宅から、これらの映画館の看板が正面に見えました。特に夜は光ってよく見えました(写真②)。毎週、番組(映画作品)の看板が変わる度に夢中になって観に行きました。自宅から1番近い100歩の距離には、麻布日活館(現在はダイエー)があり、開幕のベルが鳴って駆けつけても間に合ったのです。建物が戦前からのコンクリート造で、上映中は体が冷えてしまうため、寒い時は毛布を持参していました。寄席だったところには洋画の名作を上映した麻布名画座がありました。」



② 麻布映画劇場と麻布中央劇場の看板。左側は昼間、右側は夜間、光って見える。

ヘアサロン・ヤマモトとの御縁

麻布へ住むようになったきっかけは何でしょうか。

「麻布十番に家を建てたからです。終戦の年に父が戦争による過勞で亡くなり、それから4年後、母は美容院を開店。店が軌道に乗り1952年麻布に店舗兼住まいを建てました。美容院の最初の従業員が、麻布十番の山本理髪店(現在はヘアサロン・ヤマモト)のお嬢さん、おふたり(玲子さんと好子さん)でした。この御縁で麻布を知り、家を建てることになったのです。小学5年生だった私にとって、この麻布の新居から初めて本当の自分の人生が始まったと思っています。」

(写真③)は、木造2階建てで1階は店舗、2階は住居です。1950年代の高校

生の頃、まだ麻布十番には高い建物はなく、こちらの写真(写真④)は日進ワールドデリカテッセンの看板が遠くに白く見えます。麻布十番の商店街は実に便利で、本屋、文具屋、銭湯も2つもあり、何でもありました。私にとっての麻布は、お屋敷町のイメージではなく麻布=麻布十番(商店街)なんです。」

映画館の進化は止まらない

麻布十番に都電が走っていた頃、町には映画館がありました。かつて映画は映画館で見るものであった時代から、テレビが台頭し映画界も変遷を遂げてきました。これからの映画についてはいかがでしょうか。

「映画は無くならない。どのようにして映画を観るのか、時代時代で技術の変化があり、映画館でなくても映画を鑑賞出来ますが、どんな時代になっても、最後は進化し続ける大画面大音響の映画館が、一番新鮮だということになると思います。」

少年時代から始まった映画人生、大学在学中には映画研究会で活躍され、「全日本学生映画祭」のパンフレットを手に映画について語っていただきました。その一つひとつの物語がまるで映画のワンシーンのように印象的でした。今でも1日2本は映画をご覧になる、麻布十番が生んだ映画人、高井英幸様にお話を伺え深謝いたします。



③ 十番稲荷神社のお向かいにあった木造2階建てのご自宅。下は現在、9階建てのビル。



④ 高校生の頃、1950年代の麻布十番にて。後方に日進ワールドデリカテッセンの看板が見える。



① 高井英幸『映画館へは、麻布十番から都電に乗って。』(角川書店 2010)。スタジオジブリ発行の『熱風』に連載後、加筆・修正を加えたもの。2012年には角川文庫から文庫化されている。



第44代署長 瀬崎幸吾さん



まのちのまのち 5 纏のある消防署

「火事と喧嘩は江戸の華」。19世紀には世界一の人口都市になった江戸の、度重なる大火と江戸っ子気質をよく表す言葉だ。麻布も明和9年(1772)4月に発生した「明和の大火」で猛火に包まれた。当時、火災現場で消火活動の目印として大活躍したのが「纏」である。時は移り、麻布・六本木を火災や災害から守るため、日夜活動されている麻布消防署の署長室には「纏」が鎮座している。「麻布は発展する様々な顔をもち、新しさと伝統が共存する素晴らしい地域です。その一つの象徴ですから喜んで」と署長の瀬崎幸吾さんは快く取材に応じてくださった。



藤波強さん

この纏は「第二区六番組の纏」である。「江戸消防記念会*1」会長で六番組組頭、芝崎清昭さんが所有されている2本のうち1本を、地域の方にも目にしてもらいたいとの思いから平成20年(2008)12月に借り受け、展示されているもの。会長と会員の方が毎年出初式の日に伴纏*2を着て挨拶に来られるなど、今もつながりが深い。なお、もう1本は現在も様々なイベントで大活躍だ。

*1 町火消・市部消防組の後裔の有志により昭和14年(1939)に結成された。平成30年(2018)に「江戸町火消創設三百年記念式典」が盛大に催された。
*2 町火消の制服

纏と消防制度の歴史

消防制度ができたのは江戸時代で、江戸城と武家屋敷の消火活動のために大名16家からなる「大名火消」と旗本10家からなる「定火消」があった。八代将軍徳川吉宗が町奉行大岡越前守忠相に命じ、町人による町人のための本格的な組織を作らせたのが「町火消」である。いろは48組に本所・深川16組を合わせた64組1万人の大組織で、費用は町が負担した。当時の消火法は延焼防止のために家屋等を壊してしまう「破壊消防」が主流だった。用具は纏・竹梯・まさかり・刺又(押し倒して壊す)・鳶口(引き倒して壊す)・竜土水(手押しポンプ)等で猛火に挑み、命がけの活動に選ばれたのが「鳶」と呼ばれる勇気・機敏・技術に優れた建築労働者であった。特に体力と威勢の良い鳶が「纏持ち」に選ばれ、火事が発生すると纏をかつぎ現場へ駆けつけ、火元の風下にある家の屋根に登り、纏を振った。組の目印とし消火の士気を高め、仲間達は纏持ちの立つ家が焼け崩れないよう必死で消火活動をした。選ばれた名誉と意気に感じ素晴らしいチームワークの勇ましい姿は「江戸の華」と親しまれ、粋である。

纏のルーツは戦国時代に侍大将が「馬印」として用いた物。江戸時代に入り旗本が飾りを付け非常時に使っていたが、華美を禁じて白黒2色に統一された纏が江戸町火消のシンボルとなり、心の拠り所となった。

麻布消防署にある纏の「第二区六番組」は、江戸時代この地を守っていた町火消「三番組あ」と「五番組江」が、明治維新に「市部消防組」と改称され「第二区六番組」と定められたことによる。昭和14年(1939)「警防団」が組織されるまで活躍した。

東京消防庁麻布消防署

明治41年(1908)9月23日、第二消防署盛岡町出張所が麻布区盛岡町2番地(現・南麻布5丁目)に開署。大正13年(1924)麻布分署に昇格し、2年後、麻布消防署となり、昭和50年(1975)に現在地に新築移転した。8階建耐火造で延べ面積2399平方メートル、耐震工事も施された。飯倉出張所は、昭和43年(1968)から首都高速都心環状線の高架下にある。

143名の署員のうち、火災や事故に出場する消火・救急・救助を行う隊員は、3つの部隊で交代しながら24時間体制で出場に備えている。火災出場時に隊員は防火服・ヘルメット・ボンベ

等20kgの装備を付けて出場する。特に真夏の暑い中でも活動できるのは日頃の訓練の賜物だ。取材中も掛け声とともに、はしごを登る姿が頼もしく映った。

消防車両等(本署と飯倉出張所の合計台数)

ポンプ車	4	はしご車	1
救急車	1	指揮隊車	1
資材搬送車	1	査察広報車	4
人員輸送車	1		

平成30年(2018)の本署と飯倉出張所の合計出場件数

災害	火災:46(死者0、けが8) その他:416
救急	3877(救急車とポンプ車:1672、救急車のみ:2205)

※火災の原因は厨房とたばこの吸殻が特に多く、救急の原因は熱中症が最多。

管内だけでなく国内で大災害が発生すると派遣隊として出場し、阪神・淡路大震災には6名、東日本大震災には15名の麻布消防署員が、被災現場へ派遣された。

防火・防災運動にも積極的に取り組み、「誰もが安心して過ごせる『セーフシティ東京』」を目指し、飲食店の厨房ダクトや家庭の台所での火災防止を『STOP! 厨房火災』として啓発活動中だ。

無料で、消防署による『住まいの防火防災診断』を受けることもできる。ぜひ一度、いかがだろうか。

町火消の精神は消防団に

纏に象徴される町火消の精神は、昭和23年(1948)に警防団から改組された消防団(『ザ・AZABU』41号と42号で紹介)に受け継がれている。瀬崎署長が「麻布消防団と麻布消防署は地域の防火・防災の両輪です。むしろ地域の安全安心の主役は消防団です」とまで言われるほど。麻布消防団は100名の団員が4つの分団で活動し、定期的に訓練を重ねている。港区総合防災訓練、防火防災チャレンジデー(パーティオ十番広場)、麻布十番納涼まつりの警戒ほか、身近なイベントでも大活躍である。



麻布消防署の外観。救急車は取材中に出場していった。

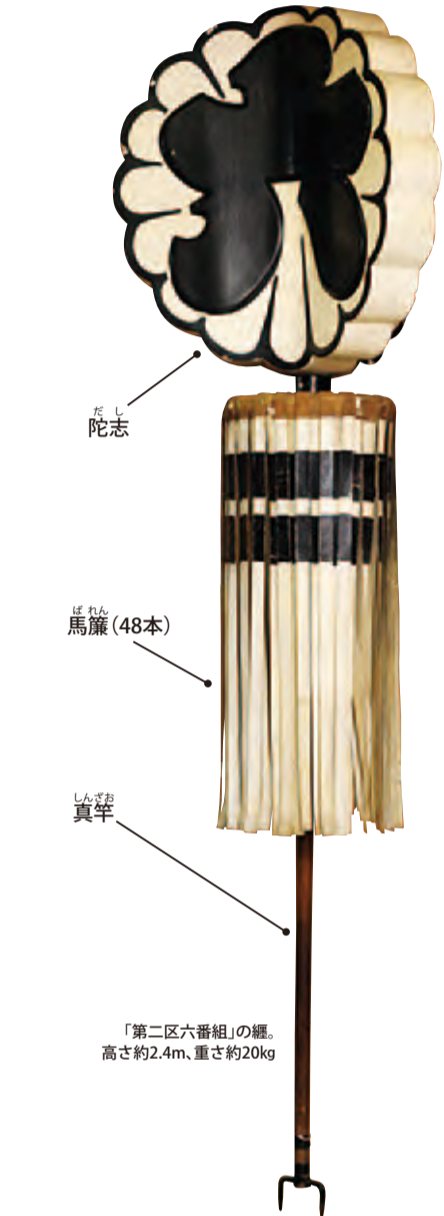


はしご車



食事中に出場があっても、帰ってからつゆだけ温めて食べられるよう、つけ麺で食べるのが消防流。

(取材・文/加生武秀、加生美佐保)



「第二区六番組」の纏。高さ約2.4m、重さ約20kg



第二区六番組組員=鳶の皆さんと纏



組員による「梯子乗り」



消防団のマークは団結のシンボル。桜の中央に纏の横断面をデザイン化。

麻布消防署(本署)
港区元麻布3丁目4-42 電話/03-3470-0119
飯倉出張所
港区東麻布1丁目30-5 電話/03-3584-0119

- 取材協力.....
東京消防庁麻布消防署
第45代署長 消防監 瀬崎幸吾さん
予防課課長補佐兼防火管理係長 消防司令 服部保彦さん
防火管理係 消防司令補 藤波強さん
- 参考文献.....
『70年のあゆみ 麻布消防署』(麻布消防署70周年記念誌編集プロジェクト)
『江戸町火消三百年』(一般社団法人 江戸消防記念会)
『消防雑学事典』(東京消防庁)
『消防団の歴史』(総務省消防庁)



アフガニスタン・イスラム共和国
 面積:652,225平方キロメートル(日本の約1.7倍)
 人口:2,916万人(2016年~17年アフガニスタン中央統計局)
 首都:カブール
 言語:公用語であるダリー語、パシュトゥー語の他、ハザラ語、タジク語等
 元首:アシュラフ・ガーニ大統領
 議会:上院(定数102議席、県議会及び郡議会から選出される各34名と大統領が指名する34名により構成)
 下院(定数249議席)

駐日アフガニスタン・イスラム共和国
 バシール・モハバット 特命全権大使

アフガニスタン・イスラム共和国

外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/afghanistan/index.html>

取材協力/アフガニスタン・イスラム共和国大使館



大使を訪ねて ④7
 麻布の"世界"から

AFGHANISTAN

東京タワーと六本木駅に挟まれた街、麻布台。ここには、外交関係の施設が数多く点在する。ロシア大使館、そして東京アメリカンクラブを過ぎた先にある、アフガニスタン・イスラム共和国大使館に赴いた。出迎えてくださったのは、バシール・モハバット駐日アフガニスタン・イスラム共和国特命全権大使と、日本人の靖子夫人。日本に足を踏み入れてから43年を迎えるという大使は、「体はアフガニスタン人、心は日本人」とおっしゃるほどの親日家。夫人も交え、大使から流暢な日本語で、お話を伺うことができた。



ヘラートのブルーモスクでお正月を祝う人々。

留学から始まった日本生活

1976年9月20日、当時19歳の大使は来日のため、羽田空港に到着。1964年から1967年まで、大使の伯父様が日本で副大使をされていたのが留学のきっかけだった。

シルクロードに位置し、当時は平和なアフガニスタンに、世界中からさまざまな人々が訪れていた。一方で、日本には、外国人がほとんどいない時代であった。

学生生活を終えて、母国の外務省に入ろうとされたが、1979年の旧ソ連によるアフガニスタン侵攻により帰国できず、結果的に日本にとどまることになる。2001年のタリバン政権崩壊の後、27年ぶりに帰国された2003年に、ようやく入省。同年、日本に再び大使館を開設して以来、この地で外交官を務められ、2017年に特命全権大使に就任された。

近年は1万人以上のアフガニスタン人が世界に留学し、戦争で人材を失ったアフガニスタンにとっての新たな人材として育っている。そのうち1割弱、750人以上が日本で学んだ。「この18年間、アフガニスタンの再建に、日本は医療、教育、インフラ、建物、道路など多くの援助をしてくれた。約束を守り、仕事の質が良く、アフガニスタンの宗教と習慣に合わせてくれた。政府も国民もすごく感謝している」と語ってくださった。

シルクロードが生み出したアフガニスタンの文化

日本と同様に四季があるアフガニスタン。イスラム教国として知られているが1000年以上にわたって仏教国であった。世界遺産になっているバーミヤンの遺跡がそれを現代人に伝えてくれている。夫人からは「中国とは違うけれども日本とは似ていて、アフガニスタンの街並みや習慣に明治時代のよさが残っている」と教えていただく。

アフガニスタン人には日本茶や紅茶を飲む習慣があり、日本のお土産で欲しいものを尋ねると「日本茶」という答えが一般的なのだそう。日本茶にカルダモンパウダーを混ぜて飲むなど、大使が「アフガニスタンと日本のコラボレーション」と話される独特の文化は、さすがシルクロードの国ならではの。

麺料理も多彩で、素麺のほか、80種類ほどの麺類があることも、さまざまな文化がミックスしたアフガニスタンの文化だ。

国際結婚について語る

大使おすすめのアフガニスタン料理をお尋ねすると、「カブリパラオ」をご紹介くださった。インディカ米に肉や果実を混ぜて炊いた「炊き込みご飯」で、夫人の作られるカブリパラオも「大変おいしい



アフガニスタンの民族衣装を身にまとい、伝統舞踊を踊る女性たち。

ですよ」と、大使。

ところで、夫人は、大使が名古屋で大学院生だったときのお仲間。もともとインド音楽に興味をお持ちだった夫人は、連日報道されるアフガニスタンの時事問題を話し合ううちに、大使と仲良くなられたそう。ドイツ留学やロサンゼルス勤務の経験があり「どこに行っても現地になじみやすい性格」とおっしゃる夫人だが、アフガニスタンには日本と近いものを感じられたのだろうと、話を伺いながら思った。結婚されてからペルシャ語も話されるようになり、「言語が分からないと文化も理解できず、通訳者の苦勞が分かりました」とおっしゃる夫人の言葉に、国際結婚の大変さが伝わった。

夫人は今、NPO法人を立ち上げ、アフガニスタンの子どもたちを支援されている。内戦後、新しい憲法ができてカブールに活気が戻ってきたが、今も続く貧困の改善や治安の回復は、ご夫妻そろっての願いだ。日本から再び渡航できる日を待ちわびる声が、大使ご夫妻に寄せられている。



ときを過ごした。麻布台の上にある大使館の屋上から、大使お気に入りの東京タワーもすぐ近くに見える、東京都心・港区の景色。大使おすすめのこの絶景を、青空に恵まれ、我々も共有できたのであった。

アフガニスタン・イスラム共和国大使館
<http://www.afghanembassyjp.com/jp>
 港区麻布台2-2-1

和やかな雰囲気の中での歓談のあと、場所を大使執務室から屋上に移し、ひと



マントゥ。「饅頭」を思わせる言葉の響きだが、形は餃子に近い、アフガニスタンの料理。



カブリパラオ。アフガニスタン風「炊き込みご飯」。



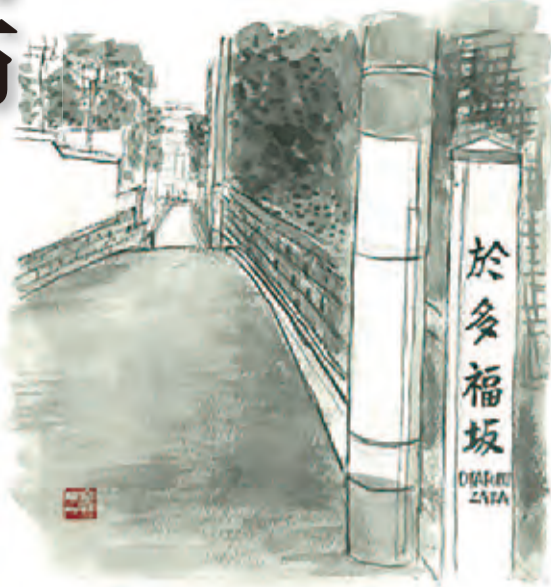
バーディ・アミール湖。標高3000m、砂漠の中に広がる自然の絶景。



於多福坂中腹から坂上に向かって

麻布 未来写真館

「麻布のユーモアを今に残す坂」



於多福坂上より坂下を臨む(地図A)

おたふく 於多福坂

「於多福」と実にユーモア溢れる名前を持っている。さぞかし幸多き坂に違いない。道標によれば「坂の傾斜が途中でいったんゆるやかになって、また下ったので、顔のまん中の低いお多福面のようなだと名づけられた」とある。「お多福面」が由来となったようだが、坂の傾斜を(面)の形になぞらえたところが心憎い。いつの頃からこの坂名を冠したのか？これが判然としない。

古地図によれば

『江戸切絵図 麻布絵図・1851(嘉永4)年』では「シオミザカ」となっている。確かに「潮見坂」は現在も於多福坂下(南側)に存在するのだが、ひょっとすると現在の(於多福)坂を含めて潮見坂だったのかも知れない。「潮見」とは当時はここから海が見えたことの証でもある。当時は絶景だったのかも知れない。約10年後の『御府内場末往還其外沿革図書・1862(文久2)年』では坂名の表記が無い。「於多福」の名を冠したのは幕末～明治以降のようだ。

松平丹波守中屋敷

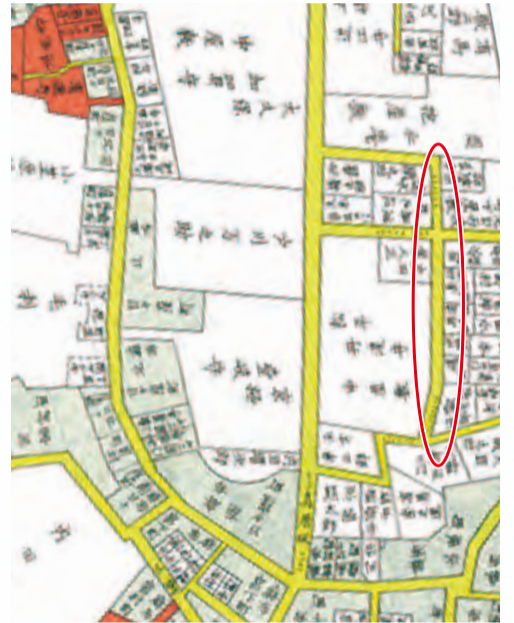
現在の場所に置き換えると「東洋英和女学院高等部」になる。地図上の「松平丹波守」とは松本藩(現・長野県)最後の藩主、松平光則を指しているようだ。実は鎌倉時代以前まで遡る事ができる家格で、戦国末期～江戸初期における(戸田松平家)初代康長が戦功により徳川家康より松平姓を賜る。以降譜代大名として幕末まで存続した。分家も多く、区別するため「戸田宗家」、治めた土地から「二連木戸田家」とも呼ばれる。本当に複雑な家系ながら初代康長は徳川家康の妹婿であり、三代将軍家光の守役と幕府からの信頼も厚かった。

現在の姿

坂下から向かって右側を永坂(麻布通り)、左側を鳥居坂に挟まれた場所でひっそりと佇んでいる。平坦な道を内包するかなり特殊な坂ともいえる。誰がいつ命名したのか謎は残るが「麻布のユーモア」を今に留める素晴らしい坂だ。



江戸切絵図 麻布絵図・1851(嘉永4)年 (国立国会図書館デジタルコレクションより) 地図内赤枠部分が現在の於多福坂。「シオミザカ」の表記が確認できる。戸田孫十郎は文殊戸田家、戸田隼人正(はやとのしょう)は旗本か。



御府内場末往還其外沿革図書・1862(文久2)年 坂名表記が無い。左右の「永坂」、「鳥居坂」には表記がある。坂左は同じ戸田家ではあるが、殆どが戸田宗家の中屋敷になっている。

- ① 坂中腹は本当に平坦になっている。右手の建物は東洋英和女学院高等部の校舎(東門)。
- ② 坂下から 1975(昭和50)年 【写真撮影:田口政典氏、写真提供:田口重久氏】
- ③ 2019(令和元)年 坂下から於多福坂を臨む40年以上が経過して、さすがに景色も変わっているが原風景を留めている点は驚きだ。



1



2



3



●参考文献 ● 『増補港区近代沿革図集 麻布・六本木』(港区立郷土歴史館)

「麻布未来写真館」とは

港区麻布地区総合支所では、地域への共感や愛着を深めていただくため、麻布地区の歴史やまちの移り変わりを記録、保存、継承する活動を行っています。麻布地区の定点写真の撮影、昔の写真の収集等については、港区在住、在勤、在学者で構成された区民参画組織「麻布を語る会 麻布未来写真館分科会」が主体となって活動しています。まちの歴史や文化を多くの方々を知っていただけるよう収集した写真をパネルとして港区ホームページや展示会で紹介していますのでぜひご覧ください。

「麻布未来写真館」では、古い写真を探しています!

明治から昭和にかけての麻布地区の建物や風景、お祭りなどの写真を募集しています。詳しくは、港区麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当までご連絡ください。お問合せ 電話:03-5114-8812



若き日の荻原井泉水(県立神奈川近代文学館所蔵)

麻布の軌跡

「自由律俳句」の父

荻原井泉水

俳句といえば、「季語を用い、五七五から成る十七文字の定型」を思い浮かべる人が大半であろう。それこそが俳句を俳句たらしめている。だが今から100年ほど前、「自由律俳句」を提唱した荻原井泉水(1884-1976)という俳人が麻布の地にいた。「季題趣味及び十七文字という外的規定は全く無意味」*1、「俳句は第一に自然の心であり、第二に自己の心境であるとともに、第三に詩としての自由のリズムをもつべき」*2と主張した。出身校・職場・住まい…人生の節目節目で麻布に縁のあったその人の、91年余の人生を辿ってみたい。

早熟で利発だった少年時代

1884(明治17)年、井泉水は芝神明町で雑貨商を営む家に生まれた。家の人たちは商売人に高等教育は不要と考えていたが、自ら正則尋常中学校に出願し入学した。ところが3年後の1899(明治32)年には、学校当局を批判する校内新聞を発行し仲間と共に退学処分を受けてしまう。が、幸い翌年には創立未だ5年目の麻布中学校へ転入と相成った。「良い学生は捨てておいても良くなる、悪い学生を教えて良くするのが教育である」*3という創立者であり校長だった江原素六の考えに救われたようだ。

同じく15歳の頃、読売新聞に投稿した論評「国字改良に就ての一意見」が一面に掲載された。早熟で利発な少年時代のエピソードである。

一高時代に俳句会を立ち上げるも落第

麻布中学校卒業後、旧制一高(現在の東京大学教養学部)へ進むと俳句魂に火が着いた。「一高俳句会」を立ち上げ、正岡子規の弟子であった河東碧梧桐、高浜虚子らに指導を受けた。英国からの帰朝後、一高の教授となった無名時代の夏目漱石を歓迎する句会を催したこともあった。

やがて、俳句に興じるあまりドイツ語の単位を落とし二年生時に落第してしまう。未亡人となっていた母親を悲しませたことを気に病み一旦俳句を止め関連本も焼却してしまった。封印は大学進学後には不届きと解かれ、大学と大学院では言語学を修めた。

『層雲』創刊。前衛的な俳句創作へ

1911(明治44)年、27歳の時に新傾向俳句を志向する河東碧梧桐の賛同を得、俳句雑誌『層雲』を自ら立ち上げた。本拠地「層雲社」の社屋は1904(明治37)年に母が建てた平屋建ての家。場所は麻布新堀町3番地(現在の南麻布2丁目)だった。

僅かの花が散りければ梅は総身に芽ぐみぬ 井泉水

2坪ばかりの庭に植わった梅の木の生命力に感化されて詠んだ句である。

1914(大正3)年には妻・桂子と結婚。しかし、『層雲』創刊時の仲間であった碧梧桐一派とは袂を分かつ年ともなった。「新傾向俳句」のさらに先、「季題無用・定型離れ」の「自由律俳句」へと向かう前衛・井泉水との考え方の相違が埋まらなかった為である。晩年、新聞のコラムで当時の志を熱く振り返っている。

「俳句というものは十七字だという常識的な通念の他に、ほんとうの俳句があることを主唱した(中略)子規の持っていた俳句革新精神が虚子によって通俗化されたのは我慢ならないということだ。二十代の若い私は俳句革新の気持ちに燃えていた。当時は“新傾向”と称せられていた。その傾向をもう一つ根底的に考え直すことだった。つまり俳句を俳句のために作ることでなくして、自分の日々の生活から、その生活の根源である自然に帰敬する心から、しぜんに生まれてくる句でなければほんとうでないという主唱だった。」(読売新聞 1972年12月2日)

自然由来の季節感を決して否定するわけではなかった。ほとぼしリズム感を大切に思っていた。だからこそ、季題や十七文字の枠組みをただひたすら尊重する姿勢に耐えられなかったようだ。

関東大震災、妻、母の死

1923(大正12)年9月1日、関東大震災勃発当時は夫婦で麻布宮村町37(現在の元麻布3丁目)に住んでいたが無事だった。震災直後にも関わらず、つぶさな記録を残している。3日目は、倒壊した商家が多い十番通りで「食料品だけは、その乱れたままの商品を手当たり売っていた、人々が手当たり売りに行くからだった。何を欲しいなどと、選り好みしている場合ではなかった。缶詰・干魚・梅干など、見当たるとまものものを、私も買い求めた」*4と生き残った商店街の活気と、体調のすぐれない妻に代わって奮闘する自身の様子を記した。続けて「平生、都会に住んでいる私達は(中略)生活に必要な物はいつでも金と代えられることとたかをくくって



『層雲』創刊号(1911年4月)。表紙画は洋画家の中村不折。(県立神奈川近代文学館所蔵)



1931年12月、門弟と共に麻布新堀町の「層雲社」前で。右が井泉水(県立神奈川近代文学館所蔵)

た。其れが今はそうではなくなった」*5と、現在にも通ずる考察を加えている。

しかし、不幸なことに翌月に妻を、翌年明け早々には母を亡くしてしまう。孤独の身となった井泉水は仏門に入ることも辞さぬ気持ちで京都を目指した。

尾崎放哉との再会

京都では「一高俳句の会」時代からの友人、尾崎放哉と10年ぶりに再会した。井泉水は自由律俳句の師として、放哉が熱心に送ってくる中から秀句を選び、時には大胆に添削した。仕事を辞め、家族関係も絶った身の上の放哉にとって、俳句こそが生きがいなのだった。

咳をしても一人 放哉

この句は、自由律俳句の中でもとりわけ有名なものであろう。井泉水の計らいで腰を落着けた香川県小豆島の寺の奥の庵で詠まれた心境俳句。無一物の生活の中で咽頭結核を患い、究極的に孤独な晩年だった。放哉、享年41歳。同年代の井泉水の人生は、まだ折り返し前だった。

再婚、そして戦後へ

1929(昭和4)年45歳の時、妻・若寿と再婚した。翌年には長男が誕生、さらに長女、次女と三人の子宝に恵まれる。子煩悩な父親となった後半生の時間は、戦中の疎開を機に移り住んだ鎌倉の地で比較的穏やかに流れていったように見受けられる。

幼少から学生時代にかけて同居していた孫の荻原朝彦さん(60歳・医師)にお話を伺った。叔母様たち(井泉水の長女・次女)によると、「7時朝食、仕事、コーヒータイム、仕事、昼食、仮眠、仕事、好物のお汁粉などのおやつ、仕事、夕食には黒ビール1杯、再び仮眠、仕事」が日課だった。『層雲』に投稿された大量の句に目を通し、手を入れ続けた。個人雑誌『随』―「書きたいことを因として書く、読みたい方に縁があれば読んでもらう」という「随因随縁」の趣旨―の制作も続けた。仕事上の来客も多かった。当時娘さんたちは実に忙しく、時には、学業より優先的にお茶出しなどのおもてなしに明け暮れることもあったようだ。

91歳11ヶ月で天寿を全う

1955(昭和30)年に昭和女子大学教授就任、1965(昭和40)年に日本芸術院会員となり、1966(昭和41)年には文化功労者として勲三等瑞宝章を受けた。90歳になるまで句会や講演会に全国を回った。1976(昭和51)年5月20日脳血栓で人生の幕を閉じる。91歳11ヶ月。

美しき骨壺 牡丹化られている 辞世の句

遺言通り、美しい白磁の壺が骨壺となり、荻原家代々の先祖が眠る妙像寺(六本木4丁目)に厚葬された。東京大空襲で麻布新堀町の「層雲社」社屋が焼失してから31年後、井泉水は再び麻布の地に戻ってきた。

*1 荻原井泉水『層雲第一句集 自然の扉』(東雲堂書店 1914) 23頁
*2 荻原井泉水『此の道六十年』(春陽堂書店 1978) 7頁
*3 日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人1』(日本経済新聞社 1983) 266頁
*4 *5 荻原井泉水『大地に嘆く』(文行社 1924年) 57頁
※引用文では、旧字体を新字体に改めました。

●取材協力 ●
荻原朝彦さん
県立神奈川近代文学館 野見山陽子さん

●その他の参考文献 ●
吉屋信子『鬼火・底のぬけた柄杓』(講談社 2003)
県立神奈川近代文学館編『俳句 その魅力展』(県立神奈川近代文学館 2006)
池内紀『ユリイカ 現代俳句の新しい波』(青土社 2011)
あらかみほ『図説・俳句』(日東書院 2011)

(取材・文／大村公美子)



1950年6月6日、鎌倉建長寺前の家で。左から長男・海一、若寿夫人、井泉水、長女・不二子、次女・柳子(県立神奈川近代文学館所蔵)



1961年、孫・朝彦さんと共に(荻原朝彦氏提供)



井泉水が眠る妙像寺(2019年4月撮影)

ガイドブックには載っていない、ご近所情報がいっぱい！ 地域SNSアプリ「PIAZZA」



麻布での暮らしがもっと楽しくなる。
麻布・六本木エリア展開中！

「麻布十番でお祭りを開催します」「区内在住の方に、扇風機をお譲りします」「六本木・東麻布周辺でおすすめの小児歯科を教えてください」など、麻布地区での暮らしに役立つ地域情報が、ユーザー発信によって集まっています！
まちの防犯・防災情報や、自治体ニュース、イベントのお知らせなど行政の情報も適宜投稿されます。
「地域のこともっと知りたい、でも検索するのは面倒…」「子育て中の悩みを相談してみたい」、そんな方はぜひ一度「PIAZZA」をお試しください。
※港区、港区麻布町会・自治会連合会、PIAZZA株式会社の3者で、平成30年7月に協定を締結し、「PIAZZA」アプリ内に「麻布・六本木エリア」を開設しました。

あなたの情報が誰かの役に立ちます！
麻布を楽しみたい人はぜひご登録ください！

登録方法

- STEP① PIAZZAアプリをダウンロード
- STEP② メールアドレスかFacebookアカウントで登録
- STEP③ 名前や出身地などを入力し、「麻布・六本木エリア」を選択



アプリはこちらからダウンロードしてください



お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課協働推進係
電話／03-5114-8802

麻布地区地域事業 麻布未来写真館 活動に興味ある方の参加お待ちしております！

麻布地区総合支所では、区民とともに麻布の昔の写真の収集、現在の風景写真の撮影を行っております。
写真撮影をするためのまち歩きを行い、麻布地域への愛着を深めるとともに、撮影した写真をパネルとして保存し、麻布地区の今と昔を広く紹介します。
写真撮影がお好きな方、麻布の歴史に興味のある方、地域への愛着を深めたい方など、ぜひお気軽にお問合せください。



お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課地区政策担当
電話／03-5114-8812

港区ホームページ

麻布地区地域事業 【麻布地区地域サロン事業】 “ちょこっと立ち寄りカフェ”にお越しください

麻布地区総合支所では、地域の高齢者の皆さんが気軽に立ち寄って楽しく交流できる場所として、「ちょこっと立ち寄りカフェ」を開催しています。どなたでも気楽な雰囲気でお茶やコーヒーを飲みながら、おしゃべりや季節のイベントなどを楽しんでいただけます。毎月、麻布地区のいきいきプラザ4館で開催しています。ぜひ、ちょこっと立ち寄ってみてください。地域のボランティアも皆さんのお越しをお待ちしています。



会場及び内容(予定)

※8月はお休みです。プログラムは変更することがありますのでご了承ください。イベント、講座、ゲームなどを行っています。

◆ 飯倉いきいきプラザ 東麻布2-16-11	◆ 西麻布いきいきプラザ 西麻布2-13-3
7/3 (水) びっくり!手品	7/18 (木) 西麻布の変遷を学ぶ
9/4 (水) コーラスを楽しむ	9/19 (木) アロマスプレーづくり
◆ ありすいきいきプラザ 南麻布4-6-7	◆ 南麻布いきいきプラザ 南麻布1-5-26
7/11 (木) みんなで参加 ミニ縁日	7/24 (水) 手作り「貝殻モビール」
9/12 (木) ポッチャ	9/25 (水) ステキなパステル画

- 時間 毎回午後1時30分から午後3時30分まで
- 対象 どなたでも
- 参加費 100円(茶菓子代含む)
- 申込み 不要です。直接会場にお越しください。

お問合せ／麻布地区総合支所区民課保健福祉係 電話／03-5114-8822

港区社会福祉協議会からのお知らせ

「第39回共に生きるみんなの歌と踊りのつどい」を開催します

歌や踊り、詩の朗読を通じて、障害のある人もない人も一緒になって参加し、楽しむ毎年夏の恒例行事です。ぜひ会場へお越しください。

- 日時 令和元年7月6日(土)午後1時30分～4時
- 会場 麻布区民センター 区民ホール
- 内容 区内の福祉施設・ボランティア団体などによる歌・ダンス・詩の発表
- 入場料 無料

お問合せ／港区社会福祉協議会 ボランティア・地域活動支援係
電話／03-6230-0284

都税のお知らせ(6月)

6月は、固定資産税・都市計画税第1期分の納期です(23区内)

7月1日(月)までに、お手元の納付書裏面に記載されている金融機関、コンビニエンスストア等でお納めください。クレジットカードでも納付できます。また、口座振替、金融機関・郵便局のペイジー対応のATM、インターネットバンキングやモバイルバンキングでも納付可能。詳細はHP又は下記問合せ先へ

お問合せ／【口座振替】徴収部納税推進課
電話／03-3252-0955 (平日9時～17時)
【固定資産税・都市計画税】港区にある物件について 港都税事務所
電話／03-5549-3800 (代表)

第69回“社会を明るくする運動” 第16回青少年健全育成大会in六本木を開催します

“社会を明るくする運動”は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動で、今年で69回目を迎えます。皆さんお誘いあわせの上、ぜひお越しください。



- 日時 令和元年7月6日(土)
式典・コンサート:午後1時30分～午後3時45分
パレード:午後4時～午後4時40分
- 会場 式典・コンサート:六本木ヒルズアリーナ(港区六本木6丁目10番1号)
パレード:六本木ヒルズアリーナ～けやき坂～麻布十番商店街～一の橋入口
- 当日の注意事項 悪天候の場合、中止することがあります。式典・コンサートは、当日午前9時、パレードは午後3時から、みなとコールで、開催の有無をご案内します。

みなとコール／03-5472-3710

お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課協働推進係 電話／03-5114-8802
保健福祉支援部保健福祉課地域保健福祉係 電話／03-3578-2381

港区麻布地区総合支所だより



令和元年度 港区総合防災訓練(麻布会場)を実施します～体験して学ぶ防災訓練～

港区総合防災訓練では、初期消火訓練等の基礎訓練のほかに、マンションベランダ避難体験(隔壁破壊訓練・避難はしご下降訓練)などの体験型訓練を主として行います。麻布会場では、子ども向けのおもちゃ交換会や英語通訳と会場を回るツアーにも取り組んでいます。

日時 令和元年11月10日(日) 9:30~11:30 予定
場所 港区六本木6-8-16 港区立六本木中学校 校庭および体育館



おもちゃ交換会 訓練に応じたポイントを集めて、素敵なおもちゃと交換しよう!防災を楽しく体験してみよう!

英語通訳ツアー 英語通訳者と一緒に会場を回り、日本での防災を身につけよう。個人でも団体でも参加できます。

地域に住む人、地域で働く人、子どもから大人まで楽しみながら防災の知恵や技を学ぶことができます。

当日はぜひお気軽に会場へお越しください!

※詳細は、次号(49号・9月発行予定)でご案内します。

お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課協働推進係 電話/03-5114-8802



麻布地区 地域事業

令和元年度「ミナヨク」参加メンバー募集のお知らせ

麻布地区では、地域への愛着を深め、新しいつながりを育むことを目的として、「みんな」でまちを「よく」する「ミナヨク」事業を実施しております。令和元年8月から、全7日間の少人数制プログラムを実施します。仲間とのアイデア出しやフィールドワークを通じて、地域の活性化に取り組む若い人材を募集します。

●開催日程(予定) ※原則、全日程にご参加ください。

Day1	8月24日(土)	13:30~16:00	オリエンテーション
Day2	9月7日(土)	13:30~18:00	アイデア出し
Day3	9月28日(土)	13:30~16:00	活動計画の立案
Day4	10月26日(土)	13:30~16:00	リサーチの報告、ツール紹介
Day5	11月16日(土)	13:30~16:00	試作の中間レビュー
Day6	12月14日(土)	13:30~18:00	アイデアの実証実験
Day7	1月18日(土)	13:30~16:00	活動の振り返り

※当日の進行状況により時間は多少前後する可能性があります。

※上記日程以外にも自主活動等があります。

昨年度の取り組み

平成30年度は、8月~10月にかけて約20名のメンバーで、全6日間の思考講座を行い、11月~1月にかけて思考したアイデアを試すための実証講座を行いました。

思考講座



実証講座



事前説明会

ミナヨクの取り組みを紹介するとともに、皆様の質問にお答えします。事前申し込みは不要です。ご興味がある方、参加を迷っている方、どなたでもご参加ください。

日時 令和元年7月27日(土) 13:30~16:00

会場 麻布区民協働スペース
港区六本木5-16-46 麻布保育園3F

会場 麻布区民協働スペース、または六本木区民協働スペース

対象 20~40代の地域の担い手となる以下に該当する方

- 麻布のまちの活性化やコミュニティデザインに興味・関心のある方
- 地域活動に参加したい方

定員 20名程度

※応募多数の場合、抽選の上、ご連絡します。

参加費 無料

応募方法 以下のいずれかの方法でお申込みください。

- ①区HP応募フォーム
- ②参加申込書をご記入のうえ、郵送してください(麻布地区総合支所協働推進課にて配布しています。)

応募期間 令和元年6月27日(木)~8月9日(金)まで

お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課地区政策担当 電話/03-5114-8812



▲応募フォーム、参加申込書ダウンロードはこちら



GUEST TALK → **FIELD WORK** → **DESIGN THINKING** → **PRESENTATION**

麻布地区のことやアイデアの作り方を知る

麻布地区を実際に見て、話を聞き、感じる

グループで麻布地区をよくするアイデアを創る

地域の皆さんに紹介し、共感してもらう

思考講座で考案したアイデアを実際に地域の方に体験していただく実証プログラムを実施。

買い物するなら地元の商店街で

ザ・AZABUへのご意見・ご要望をお寄せください

住所・氏名・職業(学校名)・電話番号・ご意見・ご要望(日本語又は英語、字数・様式自由)を書いて、直接又は郵送・ファックスで、〒106-8515 港区六本木5-16-45 麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当へ。

●電話/03-5114-8812 ●FAX/03-3583-3782

地域情報紙「ザ・AZABU」はホームページからもご覧いただけます。



「ザ・AZABU」は英語版も発行しています。

AZABU

●配布設置場所ご案内
六本木1丁目、六本木、広尾、麻布十番、赤羽橋の各地下鉄の駅、ちいばす車内、みなと図書館、麻布図書館、南麻布・ありす・麻布・西麻布・飯倉の各いきいきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所等

●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Staff

出石 侑子
おおばりか
大村 公美子
加生 武秀
加生 美佐保
小池 澄枝
佐伯 舞
染谷 正弘
田岡 恵美
高柳 由紀子

田中 亜紀
田中 康寛
西森 瑞穂
畑中 みな子
堀内 明子
堀内 實三
堀切 道子
八巻 綾子
山田 はるみ

編集後記

編集ミーティングにまだ2回しか参加していない新人です。それなのに「無茶ぶり」でこの号の編集後記担当に。今回、アフガニスタン大使館、麻布警察署の取材に参加し、麻布警察署の外観写真は僕が撮影。新人の戸惑いのなかで取材、編集のお手伝いをさせていただいた、いまそんな想いでいます。文化の薫り高いこの冊子(新人編集委員の自画自賛)は、編集仲間の「無茶ぶり合い」ミーティングでつくられている? 新人の感想です。(染谷正弘)

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします!

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。
年中無休/午前7:00~午後11:00 ※英語での対応もいたします。

電話/03-5472-3710 FAX/03-5777-8752

お問合せフォーム/ <https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form.html>

“Minato Call” information service
Minato call is a city information service, available in English every day from 7 a.m. - 11 p.m.
Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752;
Inquiry submission form: <https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form-inquiry.html>